奈伎志曽母波由の訓詁

蔦清行

○

萬葉集巻二十、四三五七番歌

葦垣のくまとに立ちて吾妹子が袖もしほほに奈伎志曽母波由（なきしそもはゆ）

の、結句について考察する。

この歌は、四三五九番歌の後に付された左注、「二月の九日、上総の国の防人部領使少目従七位下茨田連沙弥麻呂。進る歌の数十九首。但し、拙劣の歌は取り載せず」（訓読は伊藤博氏（一九八四）による）によってくくられる、一連の上総国防人歌群に属する。

校本萬葉集によれば、本文・訓ともに、問題の部分に関しての異同はない。一首の大意は、最も新しい注釈書である新大系によれば、「葦垣の陰に立って、我が妻が袖を濡らして泣いたことが思い出される」といったものであり、問題のナキシソモハユは「泣きしそ思はゆ」と解釈されている。

一

本居宣長は、『詞玉緒』においてこの歌に注目し、「萬葉集の中てにをはたがへる歌」として挙げて、以下のように述べる。

此結句は泣しぞ思ほゆといふこと也。上にぞとあれば。ゆると結ぶべきを。ゆと結びたるは。るもじたらでとゝのはず。（巻七）

この指摘の前半は、モハユという形が、オモハユから第一音節オが脱落した形であり、そのオモハユはオモホユという語と意味的に同等のものであるということを述べてい

るのであろう。また後半は、上に係助詞ソがある（ナキシソ）のだから、それに呼応してオモハユルと連体形で結ぶべきところが、実際には（オ）モハユと、終止形で結んでおり、「とゝのはず」、いわば破格であることを指摘するものとなっている。この句には、モハユという見慣れない形が存在するという問題（A）と、結びがソによる係り結びにおいて予想される連体形になっていないという問題（B）との、二つの問題が存在するのである。

一・一

（A）の問題について。

当該歌結句に見られるモハユや、それから推定される形オモハユ、及びその活用形は、萬葉集の中に例を見つけることができない。ただ、言うまでもなくユは動詞未然形に接続する助動詞であり、オモフに接続する場合はオモハユという形をとるのが本来のはずである。集中に広く見られる形がオモホユであるのは、三音節目のハが前のオ列音モに同化してホと発音された語形と見なすのが自然であろう。そうすると、オモホユとオモハユとは同じ語の異形態と考えてよいもののようである。次の（1）は、助動詞ルが接続したオモハル（オモハルルはその連体形）という語形ではあるが、音変化を経ていない形があり得たという考え方を傍証するだろう。

（1）相模道の余呂伎の浜の細砂なす児らは愛しく於毛波流留可毛（おもはるるかも）（巻十四・三三七二）

ただこのオモハルの形も萬葉集中に右の一例だけであり、また（1）は東国の歌であるという点に、やや不安を残す。それでも、少なくとも当該歌のオモハユに限っては、次の例を参考として、オモホユの異形態と言ってよいのではないかと思う。

（2）吾妹子が吾を送ると白妙の袂漬つまでに哭四所念（なきしおもほゆ）（巻十一・二五一八）

「我妹子が私を送るとて、（白たへの）袖が濡れるまで泣いたことが思われる」（新大系）という意味の歌であり、校本萬葉集によれば、第二句の訓に若干異同があるほか、類聚古集が「わぎもこわれをゝくるとしろたへの袖ひつまてもなけきしおもほゆ」という訓を持つが、右に掲げた訓で概ね問題ないと思われる。当該歌四三五七とは、内容的にも詞句の上でもよく類似するが、注目すべきは結句「哭四所念（なきしおもほゆ）」である。「所念」という表記は萬葉集の他の部分でもほぼ全てオモホユかその活用形に訓まれており、ここもオモホユで問題ないと判断される。このような、類歌であると言ってよいような歌において交

替的に現れることから、オモホユとオモハユとが同一の語の異形態だと見るのは、自然な考えと認められよう。

なお頭音オの有無について、ここでは臨時的に脱落していると認めてよいものと思われるが、能動の形であるオモフの頭音オが脱落することが珍しくないのに対し、受身・自発の形であるオモホユ（オモハユ）の頭音オの脱落は、当該歌を除いては集中に見いだされない。この問題については第三節後半でもう一度触れることにしたい。

一・二

（B）の問題について。

（B）の問題は、結びがソによる係り結びにおいて予想される連体形になっていないということであるが、大半の萬葉集の注釈書において、係り結びの破格とする『詞玉緒』の説が踏襲されており、古義など少数の例外はあるものの、ほぼ通説として認められていると考えてよい。

しかし、いわゆる破格の中でも、ソの結びが終止形になる形のものは、管見の限り萬葉集にこの一首ただ一例だけであり、宣長もそのような例は当該歌の他には挙げていない。

宣長が当該歌の他に挙げるソによる係り結びの異例（てにをはたがへる歌）は、例えば次の歌である。

（3）からころむ裾に取り付き泣く子らを意伎弖曽伎怒也（おきてそきぬや）母無しにして（巻二十・四四〇一）

（3）は、ソの係りに対して結びが動詞終止形＋終助詞ヤとなっている例であるが、終助詞を後に伴うという点で、終止形が単独で結びになっているとされる当該歌とはやや異なる。

また、次の（4）は、結びが用言連体形ではなく体言となっている例であり、これも係り結びの一般から見れば例外的に見える。

（4）藤浪は咲きて散りにきうのはなは伊麻曽佐可理等（いまそさかりと）足引の山にも野にも…（巻十七・三九九三）

ただ宣長はこのような体言で結ぶ例を「動かぬ言にて結ぶぞ」（『詞玉緒』巻三）としてひとまとまりに扱っており、「てにをはたがへる歌」には含めていない。現代でも同様に一つの類型として考えられることが多く、その点でやはり当該歌とは異なると言ってよい。

この時、当該歌四三五七においてのみ、ソの結びが終止形になっているということはいかにも不思議な現象であり、事実をもう少し検討してみる必要があるのではないだ

ろうか。このような考え方から萬葉集のソについて調べてみると、当該歌のソには、終止形を結びに取るという他にも、次のような問題点を指摘することができるのである。それは一つにはオモハユ（オモホユ）が結びとなっているということ（C）であり、もう一つはナキシという用言連体形に下接しているということ（D）である。以下この二つの問題について検討し、それをもって、当該歌の結句に見られる曽という文字が、本当に係助詞ソを表す表記であるのか、という問題提起としたい。

一・三

まず（C）について。

ソによる係り結びにおいては、結びとしてオモフが現れることは、次のような例をはじめ、数多い。

（5）振別けの髪を短み青草を髪にたくらむ妹乎師僧於母布（いもをしそおもふ）（巻十一・二五四〇）

（6）行方無み隠れる小沼の下思ひに吾曽物念（あれそものおもふ）このころの間（巻十二・三〇二二）

このオモフの例は、東歌にも存在する。

（7）青嶺ろに棚引く雲のいさよひに物能乎曽於毛布（ものをそおもふ）年のこのころ（巻十四・三五一一）

これに対し、オモフの受身・自発の形であるオモホユが結びとなることは、非常に少ない。オモフが結びとなる用例が三五例あるのに対し、オモホユが結びとなるものは、当該歌四三五七を除いては、次のただ一例の他に存在しないのである。

（8）春の日の霞める時に墨吉の岸に出で居て釣船のとをらふ見れば古の事曽所念（ことそおもほゆる）…（巻九・一七四〇）

このように、オモフとオモホユとの間で、ソによる係り結びの結びとなる例数に偏りが見られる理由については、現在の所考えがない。しかし、現象として、そこに能動の形であるオモフが多く、受身・自発の形であるオモホユが非常に少ないことは、注目されて良いであろう。

ところで、オモホユが係り結びの結びになりにくいのは、ソによる係り結びに限ってのことではない。萬葉集には一二二例のオモホユの用例があり、そのうち四五例が連体形オモホユルであるが、このオモホユルが係り結びの結びであるものは、先に挙げた（8）（古の事そ思ほゆる）の一例のみなのである。つまり、オモホユにはカ・ヤの係り結びの結びとなる例も見られないのである。さらに、オモホユはコソの結びとなることも殆どなく、わずかに次の一例を見るにとどまる。

（9）草枕旅には妻は率たれども匣の内の珠社所念（たまこそおもほゆれ）（巻四・六三五）

しかも、そのわずかな例である（9）も、本文に問題がある例なのである。まず諸本の多くは「珠社所念」という本文、タマトコソオモへという訓をもつが、オモへという訓は「所念」という文字のならびに見合うものではない。そのために結句がタマコソオモホユレと改訓されたのだが、これが九音の句であることが、新たに問題となる。字余り法則上、九音の句が認められるには句中に単独母音が二つなくてはならないが、（9）はその例外となってしまうのである。ところで、紀州本には結句が「珠社所見」とあり、ただ訓はタマトコソオモへとなっている。元暦校本には「おもへ」とあるところに赭で合点が付され、やはり赭で右にミレと訓が付けられている。これらから、澤瀉久孝氏は注釈において、この六三五結句はもともと、本文が「珠社所見」、訓がタマトコソミレではなかったかと推定された。現行見られる「珠社所念」という本文は、「古点次点時代の極めておほよそな訓下しとしてタマトコソオモへといふ訓がまづ先に出来て」しまったために、その訓に引かれて「見」が「念」に誤ったもの、つまり訓によって文字を改めた例の一つである、とされる。この説の当否を私はにわかには判定できないが、もしもこれが正しいとすれば、コソによる係り結びにおいても、オモホユ（オモホユレ）が結びとなる例は存在しないことになる。

このように、萬葉集においては、オモホユが係り結び句の結びに現れることは、極めてまれな現象であると言えよう。特に能動の形であるオモフに比べると、その少なさは際だっており、オモフが次のようにコソやカ・ヤの結びとなり得ることと対照的であると言える。

（10）吾妹子を相知らしめし人乎許曽（ひとをこそ）恋のまされば恨三念（うらめしみおもへ）（巻四・四九四）

（11）子持山若かへるてのもみつまで寝もと我は思ふ汝波安杼可毛布（なはあどかもふ）（巻十四・三四九四）

（12）このころは千歳や行きも過ぎぬると吾哉然念（われやしかおもふ）見まく欲りかも（巻四・六八六）

カ・ヤの係り結びに用いられるものは例が少ないのだが、少ないながらもオモフの方に例が存在するのに比べ、オモホユの方にはこの形の確実な例が見られなかったことは、注意されてよいだろう。

なお、オモホユが係り結びの結びに用いられることがまれであるのは、上代に特有の現象であり、中古の和歌には次のような例が少なからず見られるようになる。

（13）あめふらんひぞおもほゆるひさかたの月にだにこぬ人のこころを（古今和歌六帖・巻五・二八一七・人をまつ）

（14）初時雨降れば山辺ぞ思ほゆるいづれの方かまづもみづらん（後撰和歌集・巻七秋下・三七五・題しらず・よみ人しらず（巻八冬・四四三に重出））

一・四

次に（D）の問題について。

（D）の問題は、ソがナキシという用言連体形に下接しているということであった。萬葉集の係助詞ソは次のように体言や連用修飾成分に下接するのであるが、当該歌のように用言の連体形に下接する例は見られないのである。

（15）我が欲りし野島は見せつ底深き阿胡根の浦の珠曽不拾（たまそひりはぬ）（巻一・一二）

（16）吾が宿の萩の下葉は秋風もいまだ吹かねば如此曽毛美照（かくそもみてる）（巻八・一六二八）

用言に下接する例では、その活用形が連用形である場合と已然形である場合とが見える。そのうちまず連用形に下接する例は、

（17）今は吾は和備曽四二結類（わびそしにける）息の緒に思ひし君をゆるさく思へば（巻四・六四四）

（18）海原の遠き渡りを遊士の遊びを見むと莫津左比曽来之（なづさひそこし）（巻六・一〇一六）

のようなものがある。（17）のワビは、四段動詞ワブの連用形ワビが名詞に転成したもの（居体言）であって、体言性が強いため、体言に接続する（15）（玉ソ拾はぬ）のようなものと同様に考えることができよう。また（18）については、複合語である述語ナヅサヒク（巻十一・二四九二にナヅサヒコシヲ、巻十五・三六九一にナヅサヒキニテなどの例がある）において、それを分割する位置にソが挿入されている（述語分割的なものと呼ばれる）。語構成上、前項ナヅサヒは後項クに対する連用修飾成分と解することができるから、（18）は、（16）（かくソもみてる）のような連用修飾成分に接続するものに、いわば連続するものと捉えることができるであろう。

また已然形に接続する例は次のようなものを挙げることができる。

（19）時々の花は咲けども奈尓須礼曽（なにすれそ）母とふ花の咲き出来ずけむ（巻二十・四三二三）

（20）朝髪の思ひ乱れてかくばかり名姉之戀曽（なねがこふれそ）夢尓所見家留（いめにみえける）（巻四・七二四）

（20）の第四句は、已然形であることが表記の上からは不明なのであるが、旧訓「ナニノコヒソモ」であったのを、代匠記（精）が現在の訓みに改め、以後の注釈書も多くこれに従っている。

（19）や（20）は、已然形句が後続句の理由を表している例であるが、理由を表す要素は、広義の連用修飾成分と考えられるから、このような例もやはりソが連用修飾成分に接続する類型に含めることができよう。

以上のように係助詞ソは、用言に接続する時には連用形か已然形に接続すると認められるもののようであり、例外はク語法に下接する次の一首だけである。

（21）若月のさやにも見えず雲隠り見欲（みまくそほしき）うたてこのころ（巻十一・二四六四）

ただし（21）は、ソが仮名で示されず読み添えられているものであるという点で疑問を残す例である。校本萬葉集によれば諸本間で異同はないが、ミマクソホシキという句は他に例がなく、次のような例に見られるようにミマクノホシキと訓む可能性もあるように思う。

（22）なでしこが花取り持ちてうつらうつら美麻久能富之伎（みまくのほしき）君にもあるかも（巻二十・四四四九）

ただこのミマクノホシキという形は（22）を含めて集中五例を数える（読み添えを含む）のであるが、すべて連体修飾に用いられており、（21）のようにそこで文が切れる用法とはなっていない。その観点からすると、あるいは（21）にはミマクノホシキではない訓を考えた方がよいのかもしれない。ただそれでも、「見欲」という表記からだけでは、ミマクソホシキという訓が妥当であると断言することは難しいように思われる。またソの読み添えを妥当と認めるとしても、ミマクホシという複合語に対して述語分割的であるという点は、考慮される必要があるだろう。

なお、終止用法のソには、

（23）吾が衣摺れるにはあらず高松の野辺行きしかば芽子之揩類曽（はぎのすれるそ）（巻十・二一〇一）

のように連体形に接続する例が見られる。しかし、終止用法のソと係り用法のソとが同一の語であることは疑いないにしても、接続する語などの文法的特徴まで同一であるか否かは、判断に留保が必要であろう。

いずれにしても、少なくとも係り用法のソが連体形に下接すると見られる例は、集中に存在しない。そうすると、当該歌四三五七の結句は、ナキシという連体形にソが下接しているという点でも、例外的な現象を示していることになる。しかし、例外的としなくてはならないのは、係助詞ソの存在を前提にするからである。ここの「曽」文字は、

本当に係助詞ソを表しているのだろうか。以下、問題の部分に係助詞ソを認めない可能性について検討してみたい。

二

さて、萬葉集中、オモホユは一二三例用いられているが、その用例を調べてみると、オモホユの上に助詞シが存在する例が非常に多いことに気づく。いくつかの例をここに挙げてみよう。

(24) 秋の野のみ草苅り葺き宿れりし宇治の都の借五百磯所念（かりいほしおもほゆ）（巻一・七）

(25) 海原に霞棚引き鶴が音の悲しき夕は久尓弊之於毛保由（くにへしおもほゆ）（巻二十・四三九九）

(26) 春の日に張れる柳を取り持ちて見れば都の大路所念（おほちしおもほゆ）（巻十九・四一四二）

(26) の結句はシが仮名書きされておらず、旧訓オホチオモホユとあったものを古義が改めたものであるが、現行の注釈書は多くこの訓を採っている。毛利正守氏（一九七九）は、短歌の初句・第三句・結句は、句中に単独母音を含む場合、積極的に字余りに読んだ方がよいとされるが、それに従って現在の訓の方を妥当と認めたい。

数の面からいうと、一二二例のオモホユの内、右のようにオモホユの上に助詞シが存在するものは三三例であって、約三五パーセントと多数とは思えないかもしれない。しかし当該歌や右に挙げた (24)・(25)・(26) のように、オモホユが後に助詞や接辞を伴わずに単独で句の末尾を結ぶ場合、全体で四二例のうち助詞シが存在するのは二三例で、過半を占めるようになる。オモホユは上にシを取ることが多かった、と言ってよいだろう。

このシであるが、接続の面からいうと、単文中に用いられる時は、体言や体言相当の語に接するのが一般的とされる。体言に接続するものは先の (24)・(25)・(26) に明らかであるとして、体言相当と分類されるのは、動詞がク語法を取る次のようなものが代表的である。

(27) …紐解かぬ旅にしあれば吾のみして清き川原を見良久之惜蒙（みらくしをしも）（巻六・九一三）

(28) 春山の咲きのををりに春菜摘む妹が白紐見九四与四門（みらくしよしも）（巻八・一四二二）

また動詞連体形に接続するものも存在するようである。次の例、

(29) 賢しみと物言ふよりは酒飲みて酔哭為師（ゑひなきするし）勝りたるらし（巻三・三四一）

においては、「為」が連体形スルと訓読されることが、表記面から保証されるわけではない。しかし諸本のうち神田

本、古葉略類従抄でスルソと訓まれている他は、問題の部分に関しては異同がないうえ、ここをソと訓みえないことは、「師」という表記からも、結句がラシと終止形に結ばれていることからも明らかである。更にいえば、ラシもまた、係助詞ソに呼応する結びには現れにくいものなのである（萬葉集中には確例・読み添えともに例が認められない）。従って、スルソという訓が成立する可能性は極めて低いと言わざるを得ない。そして、このように他に有力な訓が考えられない以上、（29）の第四句は訓をヱヒナキスルシと認め、これをシが用言連体形に接続している例と考えてよいだろう。ただ、管見の限り、上代の歌謡にまで範囲を広げて見ても、用言連体形にシが接続する例はこの一例に限られる。また用言のク語法にシが接続する例にしても、用例は（27）・（28）として挙げたものの他にも存在するのであるが、ク語法になる用言は「見る・聞く」に、シに続く述語は「良し・惜し」に、どちらもほぼ限られ、かなり固定的な用法と言わざるを得ない。その意味で、シが体言相当の句に接続するという記述には問題が残るのであるが、孤例ではあるけれども（29）（酔ひ泣きスルシ）を根拠にして、体言相当の句、しかも用言連体形に接続できたと考えたい。係り用法のソは連体形に接続する例が全くなく、ク語法に接続する例も確実な例が存在しなかったことを考えると、少なくともソよりは可能性があるように思う。

このことから、私は当該の部分について、もともと（ナキシソオモハユやナキシソオモハユルではなく）ナキシシオモハユという形であったと考えたい。

その理由をまとめると、次のようになる。まずソによる係り結びにおいて、いわゆる破格とされる例の中にも、当該歌のような、結びが単独の終止形となるような形は存在しない。次に、ソの結びにオモホユが現れることも、全くないわけではないが、極めてまれであると言ってよい。さらに、係り用法のソは「（我妹子が袖もしほほに）泣きし」のような準体句に続く例が、集中に見られない。一方助詞シは、まずオモホユの上に現れることが非常に多い。それに加えて文法的にも、対応する述語の活用形が終止形であって矛盾がなく、接続の面でもク語法や、一例のみではあるが用言連体形に接続した例を見つけることができるのである。

三

当該歌四三五七は形の上では助詞シが存在しないように見えるが、想定されるナキシシオモハユという形は、助詞

シ（/si/）と、単独母音であるオモホユの頭音オ（/o/）とが隣接しているために母音連続となっている。上代語における母音連続は、母音の脱落や融合によって回避される傾向があるから、ここも前の音節の母音/i/が脱落して、ナキシソモハユという形になっていると考えられるのではないだろうか。

この母音の脱落については、もう少し説明を補っておく。当該歌の結句が、ナキシシオモハユからナキシソモハユに変化したものであるとすると、/nakisi/+/si/+/omoFayu/→/nakisisomoFayu/と表すことができる変化である。これは、句中の母音連続において前項の母音の方が狭い母音であって、かつその狭い母音が脱落する類型と解することができる。上代の母音脱落現象については、早くは岸田武夫氏（一九四二）や橋本進吉氏（一九四八）、最近では山口佳紀氏（一九八五）や柳田征司氏（一九九三）によってかなり詳細な部分まで明らかになっているが、右の類型はその中で既に共通に承認されていると言ってよい。同種の例として、ニアルがナルに変化する例（/ni/+/aru/→/naru/）や、クニウチがクヌチに変化する例（/kuni/+/uti/→/kunuti/）、ナカツオミがナカトミに変化する例（/naka/+/tu/+/omi/→/nakatomi/）などを挙げることができる。防人歌群においても、オモヒアヘナクニがオモハヘナクニへと変化する（/omoFi/+/aFenakuni/→/omoFaFenakuni/）、

（30）潮船の舳越そ白波にはしくも負ふせ給ほか於母波弊奈久尓（おもはへなくに）（巻二十・四三八九）

のような例があり、イ列音（ここでは/Fi/）の後により広い母音（/a/）がある環境で、狭い方の母音/i/が脱落している。当該歌四三五七において想定されるナキシシオモハユの、シオ（/sio/）という連続でも、/i/よりも/o/の方が広い母音であるため、/i/が脱落した結果、/so/という音が生じ、ナキシソモハユという形になっていると考えられるのである。ソは甲乙の別のある音節であり、当該歌で用いられている曽という文字は乙類のソを表す仮名である（迫野虔徳氏（一九八〇）によれば、当該歌を含む上総国防人歌群は、イ列・エ列の甲乙の表記には混乱が多数見られるが、オ列の甲乙に関しては四〇例以上ある中で一切混乱が見られないという）が、ア行のオは甲乙の別のない音節であるため、問題の四三五七のソが本当にシとオの連続から母音が脱落して生じたものであるかは疑いを持たれるかもしれない。しかしア行のオの音価は、オ列乙類の母音に近いと推定されている（大野晋氏（一九五三）など）から、母音脱落の結果生ずるオ列音は乙類のオ列音に近いものになることが、一応は予想できる。ア行のオ（/o/）の音が乙類のオ列音に近いものであるとすれば、子音（/s/）と/o/とが結び

ついて生ずる/so/も、乙類のオ列音に近い母音を持つと考えるのが自然だからである。実際の例として、次の例を参照されたい。先に挙げた、ナカツオミがナカトミへと変化する例であるが、

(31) 奈加等美乃（なかとみの）太祝詞言言ひ祓へ贖ふ命も誰がためになれ（巻十七・四〇三一）

母音脱落の結果生じたトは、乙類のトを表す仮名「等」で表されている。ツオ（/tsuo/）という母音連続から、母音/u/の脱落が起こった結果、子音（/ts/）と/o/とが結びつき、乙類のトが形成されていると考えられるのである。これは、右の予想を裏付ける現象と言うことができよう。従って、当該歌四三五七において想定される、/sio/という母音連続から生じた/so/の音を表すのに、乙類のソを表す曽という仮名が用いられていることは、母音の脱落の法則から説明されると言ってよいのではないだろうか。

ただ、助詞のような一音節語において、その音節の母音が脱落してしまうと、語の同定が困難になってしまうのではないか、という疑問が生ずる。しかし、実際にはニアルがナルに変化する例（/nui/+/aru/→/naru/）や、トイフがチフに変化する例（/to/+/ifu/→/tifu/）では、一音節の助詞であるニ・トの母音が脱落しており、一音節の助詞においても母音の脱落する例が見られることが分かる。特に後者のトイフがチフに変化する例では、通常の法則から考えれば狭い方の母音（/i/）が脱落してトフ（/to/+/ifu/→/tofu/）となるはずであり、実際にその例も存在する。

(32) 海神の神の命のみ匣にたくはひおきて伊都久等布（いつくとふ）珠に勝りて…（巻十九・四二二〇）

しかし、次の例では逆に、広い方の母音（/o/）が脱落している。

(33) …いとのきて痛き傷には鹹塩を灌知布何其等久（そそくちふがごとく）…（巻五・八九七）

通常脱落しにくい、より広い方の母音が脱落していることから、却って助詞の母音の方が脱落しやすいようにさえ思われる。恐らく、ニアリやトイフといった頻繁に用いられる形では、母音が弱化・脱落するような、規範的でない発音でも意味を了解することができたために、このような現象が見られるのだと推測される。現代語においても、例えばコノアイダ（/kono/+/aida/）という形が、ぞんざいに発音される時には、助詞ノの母音/o/が脱落した、コナイダ（/konaida/）という形になることがあるのは、この推測を傍証するものとなろう。当該歌において想定されるシオモハユ（シオモホユ）の形は、集中に三〇例、シオモフの形を含めると五一例を数えられ、ある程度の頻度で用いられていた形であるために、助詞シの母音が脱落して発音され

ても、了解できたと考えられるのである。

ところで、当該歌において想定されるようなシオモハユ（シオモホユ）という形ではないが、同様に助詞シの母音/i/が脱落する例としては、防人歌群のうちに、

（34）大王の美許等尓作例波（みことにされば）父母を斎瓮とおきて参出で来にしを（巻二十・四三九三）

という例を見つけることができる。たとえば新大系ではこの歌は「天皇のお言葉なので、父母を斎瓮のように大事に残して参じて来たのだが」と口語訳され、「「されば」は「しあれば」の約」と注が付けられる。ニサレバは、前句と後句とを「～なので」で結ばれる関係で接続しているが、次の（35）・（36）に見られる、母音が脱落していないニシアレバの形も、同様のはたらきをしていると見てよい。

（35）留め得ぬ壽尓之在者（いのちにしあれば）敷細の家ゆは出でて雲隠りにき（巻三・四六一）

（36）山遠き京尓之有者（みやこにしあれば）さ牡鹿の妻呼ぶ声は乏しくもあるか（巻十・二一五一）

これを根拠に、（34）のミコトニサレバは、助詞シの母音/i/が、母音連続によって脱落する確実な例と認めてよいと思われる。シの母音/i/の脱落と認められる確実な例はこの一例を見るのみであるが、シアレバという形は集中に三〇例存在し、やはり用いられることの多い形であったために、脱落しても語の同定が可能であったのではないかと思われるのである。

なお巻四・七九〇や巻十七・三九三三にアリサリテという語があり、これがアリシアリテからの母音の脱落（/arisi/+/anite/→/arisanite/）ではないかとする説がある。説得力のある説であり、そう考えて歌の意味にも矛盾をきたさないのであるが、実際の表記の上でシが仮名で示された例が見あたらない点に不安を残している。また「夕されば」「秋されば」のサレバを、シアレバからの母音の脱落であるとする説もある（谷川士清『和訓栞』「されば」の項など）が、こちらは現在一般には認められていないもののようである。

このような例も考慮に入れて、助詞シの母音/i/の脱落が、萬葉集の中で頻繁に見られる現象だと考えるならば、当該歌四三五七においてもシの母音/i/が脱落しているという見方は、より強い信頼性を得ることになるだろう。

ただアリサリテや夕サレバ・秋サレバのような例は認めず、助詞シの母音/i/が脱落する例が当該歌の他には（34）（ミコトニサレバ）ただ一例であるとすると、なぜ当該歌や（34）に限ってそれが見られるのか、ということが考えられなくてはならない。

これは以下のように説明される。まず、オモホユが短歌

結句に現れる場合、その殆どが字余り句になり、特に当該歌のように助詞シ＋オモホユ（終止形）で句が結ばれる場合、一つの例外もなく字余り句となっている。毛利正守氏（一九八八）は「字余りは一句中文字が余り、脱落現象は余らないので、表記上ではすこぶる離れた存在のようにもみられるが、（引用者注・単語結合の度合いという点では）その実態は近いものであった」とされるが、これに従えば、ナキシシオモハユのような字余り句が、音声的・臨時的に母音を脱落することもあったと考えられるのではないだろうか。しかも、毛利氏によれば、東歌及び防人歌は、それ以外のものに比べて母音の脱落が現れやすい傾向があるという。例えばオモハユ（オモホユ）に対応する能動の形オモフの場合、（四音節（語）＋オモフ）という環境で母音オが脱落を起こすのは、東歌・防人歌以外では、イハフトモヒテ（巻十九・四二六三）・アハムトモヘヤ（巻一・三一）など助詞トに続く場合に限られるが、東歌及び防人歌においては、ココロハモヘド（巻十四・三三六七）・アレヲシモハバ（巻二十・四四二六）のように、ハオモフ・シオモフの場合などにも幅広く脱落が見られるというのである。つまり、東歌及び防人歌は、母音の脱落を起こしやすいために、あるいはその脱落が表記面に反映されやすいために、通常母音の脱落例が見られないシオモハユ（オモホユ）の形においても、防人歌群に属する当該歌では脱落例となっている、と考えられるのである。シアレバの唯一の脱落例であった（34）も下総国防人歌群に属しており、同様に考えることができよう。

そして以上の説明は、本稿一・一節末で述べたオモホユの頭音オの脱落についても説明するものとなっているのではなかろうか。オモホユの頭音オが脱落することは、確かに萬葉集において一般的な現象ではないが、当該歌が防人歌であって、それ以外のものに比べて母音の脱落が現れやすい傾向があるために、音声的・臨時的に脱落している、あるいはその音声的な脱落が表記にまで反映している、と考えられるのである。

ただ、防人歌群と一口に言っても、国ごとに相当大きな異なりがあることは注意しなくてはならず、特に当該歌を含む上総国防人歌群においては、東歌・防人歌に特有と思われる母音脱落の例が見られない。上総国防人歌群は、防人歌群の中でも、イ列・エ列の甲乙の混乱が見られる他は訛音的な表記が見られない群であり、何らかの規範（正書法）に則って表記されているらしい。従って、ここに限っては防人歌だから母音の脱落を起こしやすいとは言えないかもしれない。この点についてはさらに考慮する必要があろうが、少なくとも母音脱落の法則から言えば、中央語に

も同様の例が見られる可能性がある、つまり、現在これらの例が中央の歌に見られないのは、偶然に過ぎない可能性もあるのだということは、付言しておきたい。

四

以上、本稿では萬葉集巻二十・四三五七番歌の結句について、従来考えられてきたごとくナキシソオモハユ（ル）ではなく、ナキシシオモハユと考えた方が本来の姿に近づくであろう事を、主として文法面から論じ、そう考えて音韻面にも矛盾をきたさないことを確認してきた。

なお、右のように考えると、ソによる係り結びにおいては、東歌・防人歌であるか否かに関わらず、結びが用言終止形となるような破格の例は存在しなくなる。一つの訓みを考える過程の中で、上代における係り結びが、後の時代におけるよりも、係りと結びの外形的呼応という点において強い拘束力を持つ、という文法的な問題に及ぶことができたなら、本稿の目的は達せられたと言えよう。

〔補論〕ところで本稿の中で問題の歌の類歌と考えた巻十一・二五一八について、木下正俊氏（一九五八）が既に触れられていることではあるが、結句の改訓の可能性が考えられないだろうか。

（2）吾妹子が吾を送ると白細の袂漬つまでに哭四所念（なきしおもほゆ）（巻十一・二五一八）

既に述べたように、短歌結句において句中に単独母音が存在する場合、字余り句になるものの方が圧倒的に多い（毛利正守氏（一九七九）の調査による）。またオモホユが短歌結句に現れる場合も、ほぼ例外なく字余り句となることも、既に述べた。（2）の結句は単独母音を含むにもかかわらず七音で訓まれているが、これはむしろ例外的なのである。

ところで、巻十一に限り、しかも人麻呂歌集の例を除いても、過去（回想）の助動詞キの連体形シが補読されることは少なくない例がある。

（37）大原（おほはらの）古郷（ふりにしさとに）妹を置きて吾いねかねつ夢に見えつつ（巻十一・二五八七）

（38）夕されば君来まさむと待夜之（まちしよの）名残りそ今も寝ねかてにする（巻十一・二五八八）

（37）は、巻二・一〇三に「大原乃古尓之郷尓」とあり、オホハラノフリニシサトニと訓読することは殆ど疑問がない。また（38）は、巻十二・二九四五に「玉梓の君が使ひを待之夜乃（まちしよの）名残りそ今も寝ねぬ

夜の多き」という類歌があって、三句目をマチシヨノと訓むこと、これも殆ど疑われない。

また、言うまでもないことであるが、「四」はシの音にあてられる仮名として用いられることがあり、助詞シを表す例も多く存在する。巻十一の中でも、

(39) 真十鏡直二四妹乎（ただにしいもを）相見ずは我が恋止まじ年は経ぬとも（巻十一・二六三二）

という例を見つけることができる。

以上から、「哭」字を、助動詞キの連体形シを補読してナキシと訓み、「四」字を助詞シに訓みなして、結句をナキシシオモホユと訓むことを提案したい。これに伴って考えられなくてはならない文法的問題については、本論中に既に述べた。

参考文献

伊藤博（一九八四）「防人歌群」『萬葉』第一一九号
大野晋（一九五三）『上代仮名遣の研究』岩波書店
岸田武夫（一九四二）「上古の国語に於ける母音音節の脱落」『国語と国文学』第一九巻第八号
木下正俊（一九五八）「準不足音句考」『萬葉』第二六号
迫野虔徳（一九八〇）「防人歌の筆録―その言語資料としての性格―」『語文研究』第五〇号
橋本進吉（一九四八）「国語の音節構造の特質について」『国語学』第一号、後『国語音韻の研究』（橋本進吉博士著作集第四冊　岩波書店・一九五〇）所収
毛利正守（一九七九）「萬葉集に於ける単語連続と単語結合体」『萬葉』第一〇〇号
毛利正守（一九八八）「東歌及び防人歌における字余りと脱落現象」『人文研究』第四〇巻第三分冊
柳田征司（一九九三）『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
山口佳紀（一九八五）『古代日本語文法の成立の研究』有精堂

引用に用いた文献は以下の通り（萬葉集の、注目部分以外の仮名・漢字の書き分けは、私意に従った。萬葉集からの用例は巻数と（旧編）国歌大観番号のみを示した）。

萬葉集　『萬葉集本文編』（旧版）佐竹昭広・木下正俊・小島憲之　塙書房・一九六三
古今和歌六帖　『新編国歌大観』「新編国歌大観」編集委員会　角川書店・一九八三～一九九二
後撰和歌集　新日本古典文学大系『後撰和歌集』片桐洋一　岩波書店・一九九〇
詞玉緒　『本居宣長全集』大野晋・大久保正編集校訂　筑摩書房・一九六八～一九九三

和訓栞　『増補語林倭訓栞』　皇典講究所印刷部・一八九八～一八九九

萬葉集の注釈書を示すのに、本文中では以下の略称を用いた。

『萬葉代匠記』（精選本）契沖　『契沖全集　一～六』岩波書店・一九七三～一九七五　…代匠記（精）

『萬葉集古義』鹿持雅澄　名著刊行会・一九二八　…古義

『萬葉集注釈　一～二〇』澤瀉久孝　中央公論社・一九五七～一九六八　…注釈

新日本古典文学大系『萬葉集（一）～（四）』佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之　岩波書店・一九九九～二〇〇三　…新大系

（つた　きよゆき・博士後期課程）